

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2399 号

急性期から疼痛専門医による治療を受けた帯状疱疹患者の神経障害性疼痛にみられる要素の検討

(Investigation of neuropathic pain component by the stage of a disease of the herpes zoster associated pain patients received pain clinic treatments)

石川 理恵 (いしかわ りえ)

博士 (医学)

#### 論文審査結果の要旨

帯状疱疹に伴って生じる痛みは、侵害受容性疼痛と神経障害性疼痛の病態が混在しており、病期によってどちらが主体であるかが異なる。初期は、皮膚炎と神経炎の合併であるため侵害受容性疼痛の要素が多い。その後、皮膚と神経の炎症が治まり、神経が障害を受けると帯状疱疹後神経痛へと移行する。つまり、発症から時間が経過すると侵害受容性疼痛の要素が減り、神経障害性疼痛の要素が多くなると考えられている。しかし、その神経障害性疼痛へ移行する時期や病期によって両者の要素が占める割合は不明である。そのため、痛みの性状の把握は、治療の1指標にもつながるのではないかと考え、帯状疱疹関連痛の急性期から慢性期における神経障害性疼痛の要素と疼痛との関係を、前向きに調査する必要があると考えた。さらに神経障害性疼痛スクリーニング質問票には、国際的にも広く使用されている Pain DETECT Questionnaire (以下 PDQ) を用いることが有用と考えた。これまでに、帯状疱疹罹患患者を対象に Neuropathic Pain Symptom Inventory (NPSI) や Self-completed Leeds Assessment of Neuropathic Symptoms and Signs pain scale (S-LANSS) という神経障害性疼痛のスクリーニング質問票を用いた調査が報告されているが、PDQ を用いた報告はない。

一方、治療介入による変化に関しては、帯状疱疹の皮疹消退後に痛みが3か月以上持続した帯状疱疹後神経痛患者を対象としてプレガバリンを52週継続投与した場合、VASはベースラインの62.0mmから-33.7mmとなり鎮痛効果が維持されたと報告しているが、急性期からの治療介入ではない。したがって、本論文は、急性期から疼痛専門医による治療を受けた帯状疱疹患者を対象に、神経障害性疼痛にみられる要素を日本で開発された神経障害性疼痛スクリーニング質問票 (Japan-Q) と PDQ の両者を用いて調査したはじめての臨床的に意義のある論文である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。